

幡山地区・山口

矢田川上流域にあたる山口は古代から続く地名です。農業を中心とした村落ですが、丘陵内には古代から中世にかけての窯跡が多く分布しており、この地域から瀬戸窯が始まったと考えられています。



広久手第30号窯跡（市指定史跡）

平成12年(2000)に、愛知万博エントランスエリア整備にともなう発掘調査が行われ、窯体1基とそれにとまなう灰原・工房跡等が発見されています。調査後に窯体は現地保存され、あいち海上の森センター「窯の歴史館」内で展示されています。窯体は半地下式の窖窯で、天井および煙道部は流失していましたが、焚口から燃烧室・焼成室まで比較的良好に残存しています。窯体の規模は長さ4.2m、最大幅1.45mと比較的小さなものです。この窯跡で生産された製品の年代は、10世紀中葉から後葉にあたり、現在瀬戸市域で生産されたやきものの中で最も古く、瀬戸窯で最古の窯跡と位置付けられています。



とう やま



塔山城跡

塔山城は、堂山城とも相坂城ともいわれ、標高 175 m ほどの丘陵頂部附近の主郭（本丸）と北西に延びる標高 165 m の尾根上の郭があります。後者には室町時代を中心とした時代に製作されたと思われる五輪塔・宝篋印塔が 7 組以上まとめられた「おごりんさん」と呼ばれる聖地があり、毎年 4 月に吉野町の人々によって城主であったとされる森河下総守の供養祭礼が行われています。北東から主郭への入口と思われる標高 160 m の地点には柵形状の虎口がみられます。城主に関しては、古代の天智天皇の代に山口郷の開発を主導した森河下総守の居城というものと、武田信玄が尾張へ侵攻するための偵察基地であったとする伝承があります。



陶器



石器



創造



街



交流



自然



祭り

本泉寺



教春山本泉寺は、浄土真宗高田派の寺院です。創建は弘安 6 年（1283）のことと伝えられています。現在の境内地は、山田泰親の居城（上菱野城（山口城））があった場所であり、三方を山や尾根で囲まれ、南側に堀や土塁を配した痕跡がみられます。山田氏は、重宗系源氏の末裔で、平安時代末から鎌倉時代初めごろに勢力を持った武家でした。承久の乱（1221年）で京方の山田重忠は敗れ、その勢力がいったん衰えますが山田泰親・親氏兄弟が、山口・菱野の地の地頭となっています。弘安 4 年（1281）に下野国高田専修寺の顕智上人の尾張での布教に感化された泰親が居城の南側に本泉寺を建てたとされており、慶長 18 年（1613）に現在地に移転したと伝えられています。

八幡社（山口）



延喜式に記載される山田郡の 19 座の内の「小口神社」が山口八幡社であると考えられています。山口八幡社の境内地には、古墳時代の横穴式石室等（山口八幡 1 ～ 3 号墳）もみられ、古くから聖地と考えられていた場所に神社が営まれたものと考えられます。社伝では、承久 2 年（1220）に山田次郎重忠が当地へ八幡宮を勧進し、山口八幡社社殿を造営、山口神社を合祀したとされます。山口八幡社には、瀬戸市に残る最古の石造鳥居（延宝 5 年（1677）造）と、2 番目に古い石燈籠（延宝 7 年（1679）造）があり、ともに市指定文化財となっています。



🗨️ 山口の警固祭り（市指定文化財 / 無形民俗）

江戸時代の山口村は、近隣の菱野村・本地村等とともに一団となって、三河国境の猿投神社祭礼の際に飾り馬を奉納しました。このように複数の村々がまとまって献馬をすることを、「合宿」といいます。山口村を含んだ「山口合宿」は山口村が取りまとめを行っていました。明治5年（1872）に山口八幡社が郷社の格となって以降、猿投祭礼と同様に郷社の山口八幡社に周辺の6か村が献馬する「郷社祭り」も行われるようになり、今日まで大きな慶事の際に行われています。また、かつて秋の例大祭には、山口村内の祭礼として12のシマから献馬がなされていましたが、現在は行われていません。

山口郷土資料館



開館時間：10：00～16：00
(入館は 15:30 まで)

休館日：土・日・祝日

駐車場：無

入館料：無料

山口地区の文化・文化財を後世に残し、未来に向けて皆で学び楽しむ場所として、平成 8 年（1996）に山口自治連区の独自な活動により設立されました。古墳や窯跡の出土品を「やまぐちのあゆみ」等のコーナーで陳列し、山口地区の歴史を紹介しています。さらに山口の史跡・名所・歳時記・農家の暮らし・農機具・自然豊かな山口地区の四季折々の草花昆虫鳥などを紹介しています。二階正面には「秋の大祭 警固祭り」の等身大の模型を展示、映像コーナーでも祭りの様子など伝統行事の継承、保存の役割を果たしています。地域の史跡めぐりや民俗調査を継続的に行っています。

吉田 2 号墳（移築）



サンヒル上之山団地造成工事にともない昭和 61 年（1986）に発掘調査が行われ、現地で保存することが困難であったため、団地の西端のふれあいの森公園東方に移築復元されました。直径 12 m の円墳で、石室の奥壁から石室入口までの長さは 3.7 m、幅 1.45 m の規模です。石室の床には円礫が敷かれて、手前の羨道から一段下がっており、竪穴式石室の形状に類似する「竪穴系横口式石室」という構造です。こうした石室は西三河に多くみられ、太平洋沿岸部を経由して北部九州に系譜が求められる構造です。石室から出土した須恵器は 6 世紀末、墳丘からは 7 世紀前葉の須恵器が出土しています。



宮地古墳群（市指定史跡）

2基の円墳（2・3号墳）と、1基の前方後円墳（1号墳）で構成されています。いずれも、発掘調査はされておらず、詳細については不明です。1号墳は石室の位置が不明であり、古墳であるかどうかも含めて検討される必要があります。2号墳と3号墳は、ともに直径12mほどの円墳で、墳丘の中央部には石室の石材が一部確認され、その形状から古墳時代後期の竪穴系横口式石室である可能性があります。各古墳に供献・副葬された遺物はこれまで確認されていませんが、横穴式石室採用前の古墳である可能性が高いため6世紀を中心とした時期の古墳であったと考えられます。



塚原第 1 号墳（移築）

塚原第 1 号墳は市内でも最大規模の石室を有する古墳で、昭和 41 年（1966）に石室の調査が、平成 18 年（2006）には道路工事にともなう発掘調査が行われ、直径 18 m、高さ 2.3 m の墳丘に全長 7.3 m の石室が確認されました。石室からは鉄刀、須恵器の蓋坏、高坏などが出土し、墳丘から須恵器の器台、脚付埴なども出土しています。須恵器の年代から 6 世紀後半に築造された古墳と推定されます。古墳の発掘調査の後に石室を解体し、瀬戸東部環状線脇に発掘当時の状況を復元して移築されました。移築古墳は墳丘の上に登って石室内を見学することができ、現地保存された山口堰堤 3 号墳とともに歴史広場として一般に公開されています。



愛知県陶磁美術館

愛知県が県政 100 年記念事業の一環として、陶磁文化の振興、陶磁器に関する文化財の保存、住民の陶芸に関する教養の向上、陶磁器産業の発展に寄与することを目的として、昭和 53 年（1978）6 月 1 日に開館しました。開館 35 周年を迎えた平成 25 年（2013）6 月 1 日に、館の名称を「愛知県陶磁資料館」から「愛知県陶磁美術館」に改称し再出発しました。日本やアジアをはじめとする世界各地の様々なやきものの魅力を展覧会や関連催事を通じて紹介しています。

休 館 日：毎週月曜日（休日の場合は翌日）、年末・年始

開館時間：9：30～16：30

駐 車 場：有



陶器



磁器



創造



街



交流



自然



祭り



南山 8・9 号窯跡

瀬戸市南部の幡山丘陵、現在の愛知県陶磁美術館の駐車場の一角に所在する窯跡で、現在、5 基の窯体が覆屋の中に保存展示されています。いずれも窖窯といわれる、分炎柱を有する丘陵斜面をトンネル状に掘りぬいた窯体で、発掘調査では平安時代の灰釉陶器や中世の日常雑器である山茶碗が出土しています。出土品の年代は 11 世紀中葉から 12 世紀前葉、13 世紀中葉から後葉と 2 時期に分かれており、二つの操業期間の間に 100 年の空白期間があったことが明らかにされています。

山口地区地図



- ① 広久手第 30 号窯跡 (P136)
- ② 塔山城跡 (P137)
- ③ 本泉寺 (P138)
- ④ 八幡社 (山口) (P138)
- ⑤ 山口の警固祭り (P139)
- ⑥ 山口郷土資料館 (P140)
- ⑦ 吉田 2 号墳 (P140)
- ⑧ 宮地古墳群 (P141)
- ⑨ 塚原第 1 号墳 (P142)
- ⑩ 愛知県陶磁美術館 (P143)
- ⑪ 南山 8・9 号窯跡 (P144)



陶器



磁器



創造



街



交流



自然



祭り